美しさを保っていて、目は落ち着いていたが鋭い知性はなかった。このような顔は、絶え間なく襲ってくる災厄を出し抜くことに慣れた庶民にはないものだ。

その通りがかりの男に、プローシカは苛立ちを感じた——特にそのくちびるに。

「なに口をとんがらせてんだ？　おれの手にキスしようってか？」

見習い修道士は立ち上がり、自分の進むべき方向へと歩いていった。ところがその進むべき方向がいったいどちらにあるのかは、自分でも正確には分かっていなかった。

プローシカはそのことをすぐに感じとって、見習い修道士が立ち去った後にこう言った。

「行っちまった。けど、どこへ向かってんのか自分でも分かってねえんだろ。あいつをくるっと回したら、こっちに戻ってくるぜ。穀潰しのクソ馬鹿が！」

ザハール・パーヴロヴィチは、プローシカの早熟な知性にいささか狼狽を覚えた。ただザハール自身が人間に馴染んだのは遅かったし、長いこと人間たちは自分よりも賢いと思っていた。

「プローシカ！」ザハール・パーヴロヴィチは尋ねた。「それで、あの小っちゃな男の子はどこにいったんだね——あの漁師のみなし児は？　あの子を引き取ったのはおまえの母さんだったな」

「サーシャのことか？」プローシカは察した。「あいつがいちばん先に村から逃げたんだ！　あいつは悪魔の類だよ——あいつのせいで暮らしがぶち壊しだ！　最後に残してあったパンの欠片を盗んで、夜のうちに消えちまった。おれだってとことん追いかけたけど、結局「勝手にしろ」っつって家に戻ったんだ……」

ザハール・パーヴロヴィチはそれを信じ、考えこんだ。

「それで、おまえの父さんはどこにいる？」

「父ちゃんは出稼ぎ。で、おれが家族みんなを養えって言いつけられた。人に頭を下げてパンをもらって、村に帰ったら母ちゃんもガキどももいねえ。小屋ん中じゃ人の代わりにイラクサが育ってる……」

ザハール・パーヴロヴィチはプローシカに五十コペイカやり、町に来たらぜひ家に立ち寄ってくれと頼んだ。

「その帽子をくれねえかな」。プローシカが言った。「あんたはどうせ何も惜しかねえだろ。おれの頭は雨に打たれて風邪ひいちまうかもしんねえ」

ザハール・パーヴロヴィチは、自分にとって帽子そのものより大切な鉄道員の徽章を外してから、制帽をやった。

長距離列車が通り過ぎていった。プローシカは、ザハール・パーヴロヴィチの気が変わって金と帽子を取り返されないように、さっさと立ち去ってしまおうとして立ち上がった。制帽はプローシカのぼさぼさ頭にぴったり似合ったが、プローシカはちょっと試してみたまでで、後は帽子を脱ぎ、たたんでパンと一緒に袋の中にしまった。

「じゃあな、神さまと共に歩めよ」。ザハール・パーヴロヴィチは言った。

「どの口でほざいてんだ。そっちはいつもパンと共に歩んでんだろ」。プローシカは非難した。「こっちにゃパンだってねえんだ」

ザハール・パーヴロヴィチはつづけて何を言ったらいいか分からなかったし、金ももう尽きていた。

「つい最近、町でサーシャに会ったな」。プローシカは言った。「あの木偶の坊、もうすぐにでもくたばっちまうね。誰もあいつにゃ物をやらねえし、物乞いする度胸もねえ。おれが食い物をやったって食わねえしな。あんた、おれの母ちゃんのとこにあいつを棄てていったろ——そろそろサーシャの分の金を払えよ！」真剣な声でプローシカは締めくくった。

「サーシャを何とかわしのところに連れてきとくれよ」。ザハール・パーヴロヴィチは答えた。

アンドレイ・プラトーノフ著　工藤順ほか訳
"チェヴェングール"（ちくま社，2022年6月）

アンドレイ・プラトーノフ著"チェヴェングール"

町に入る前に身だしなみを整えた。彼はソヴィエト的な生の科学を理解しておらず、その中で惹きつけられたのはたった一つの分野——協同組合だけだった。それについて『貧農新聞』（ベドノター）〔当時実在の新聞（ボリシェヴィキ中央委員会発行）〕で読んだことがあったのだ。今に至るまで彼は沈黙の中で生きてきて、いかなる事業にも寄り添うことなく、心の平穏を失っていた。だから不意に苛立ちを覚えて、家の聖像（イコン）を安置した隅でつねに火を灯してあるランプを消してしまうことがよくあり、このために妻は羽毛布団の上に身を投げ、声をあげて泣くのだった。協同組合について読んだ後、アレクセイ・アレクセーエヴィチはミラ＝リキヤの大主教奇蹟者聖ニコライ〔ロシア正教会の聖人。ミラの聖ニコラオスとも〕の聖像に近づき、そのやさしい小麦色の手でランプに火を灯した。この時から、彼は自分が為すべき聖なる事業と、以後の生における清らな道を見いだした。彼には、レーニンが自分の死んだ父親のように感じられた。父はかつて、まだ小さかったアレクセイ・アレクセーエヴィチが遠くの火事に怯えながら、その恐ろしい出来事を理解できなかった時に息子に言ったものだった——「おい、アレクセイや、もっと近くにくっついてなさい！」小さなアレクセイは、やはり上等な白パンの香りのする父にくっつくと安心し、睡たげに微笑みはじめた。「ほら、分かったろ」。父は言った。「何も怖いことなんてないさ！」アレクセイは父を離さないまま眠りに落ち、朝になると母がキャベツ入りピローグ〔ロシア風パイ〕を焼くために熾した火がペチカで燃えているのを見た。

協同組合に関する記事を熟読して、アレクセイ・アレクセーエヴィチはソヴィエト政府に対して心から寄り添い、その温かい民衆的な善を受け容れるようになった。彼の眼前に里程標の立った聖なる大道がひらけた——その道は、豊かな生活や友愛が実現する神の王国へと続いている。この以前にはアレクセイ・アレクセーエヴィチは社会主義を恐れてばかりいたが、社会主義とは協同組合の異名だと知った今となっては、アレクセイ・アレクセーエヴィチは熱烈に社会主義を愛しはじめた。子どもの頃、彼は長いこと父なる神（ワオフ）*を恐れて、神が好きではなかった。だが母親が「それじゃ、息子や、わたしは死んだ後、どこに消えることになるんだね？」と彼に言った時、母の死後に神が母を守ってくれるように、幼いアレクセイは神のことも愛そうと決めたのだった。というのも、神のことは父の代わりだと考えていたのだったから。

アレクセイ・アレクセーエヴィチがチェヴェングールにやって来たのは、協同組合を——つまり、人びとを貧困や相互の精神的な残忍さから救済するものを探すためだった。

近い場所まで来て見てとれたように、チェヴェングールでは人間の知性がもつ得体の知れぬ力が働いていたが、アレクセイ・アレクセーエヴィチはあらかじめ知性を赦していた。というのも、彼は協同組合による人間の統合と、人間のあいだに働く実利的な愛情を実現するために出かけてきたのだから。アレクセイ・アレクセーエヴィチはまずはじめに協同組合の規約を手に入れたいと思っており、そのあと郡執行委員会に赴いて、その議長である同志チェプールヌイと協同組合ネットワークの構築について、兄弟のようにして会話を交わしたいと思っていた。

しかしそれに先立って、アレクセイ・アレクセーエヴィチはチェヴェングールという、革命がもたらす損な経費に脅かされる町について考えをめぐらすことにした。夏の埃が、勤労を好む大地から灼熱の高みへと舞い上がっていった。空は、庭や、郡の小さな礼拝堂群、町の不動産の上に広がり、アレクセイ・アレクセーエヴィチの心震えるような追憶そのものとしてじっと佇んでいた——しかしそれがどのような追憶であるかは、誰にでも理解できるものではない。そしてアレクセイ・アレクセーエヴィチは今、自分自身を完璧に認識して立っていた。空の暖かさが、まるで子ども時代や母の肌のように、あるいは葬り去られた永遠の記憶の中に消えてしまったずっと昔のことのように感じられた。——太陽が輝く空の真ん中か

＊ 聖書中の表現で、神の異名の一つ。新共同訳では「万軍の主」と訳される部分の「万軍」に当たる語。ロシア正教会では、聖像における至聖三者（三位一体）のうちの「父なる神」の形象が「サワオフ（サバオース）」と称される。

アンドレイ・プラトーノフ著"チェヴェングール"

に敬うことになった。

セルビノフはいまだ自分がどこにいるのかを知らず、この郡の静寂のせいで、またあたりを取り巻く草地の飽満した空気のせいで、モスクワへの郷愁の念に駆られ、帰りたいと思い、明日には徒歩でチェヴェングールから出てゆこうと決めた。

「あなたたちのところは革命なんでしょうか？」セルビノフはドヴァーノフに尋ねた。

「ぼくらのは共産主義（コムニズム）です。聞こえますか――同志コピョンキンが外で咳をしているでしょう。彼は共産主義者（ニスト）です」

セルビノフはたいして驚きを感じなかった。いつも革命が自分よりもすぐれたものだと考えていた。この町で発見したものは己れの惨めさだけであり、こう思った――おれは川の中の石そっくりだ。革命が頭上を流れ去ってゆくが、おれは自分への愛着のせいで重くなって、水底に置き去りになるのだ。

「しかし不幸や悲しみはチェヴェングールにもあるのでしょう？」セルビノフは尋ねた。

ドヴァーノフは、ある、と答えた。不幸や悲しみ――これらもまた人間の身体なのだ。

ここでドヴァーノフは額を机に押し当てた。晩が近づくにつれ、彼は苦しいほど疲れてしまうのだったが、それは動き回ったためというよりは、一日じゅう配慮を巡らせ、恐れをもってチェヴェングールの人びとを見守っていたことからくる疲れだった。

セルビノフが外気に向けて窓を開け放つと、すべては静かで暗く、ただ曠野からのんのんと長い真夜中の音が運ばれてくるのみで、その音は夜の平穏を掻き乱さない程度の穏やかなものだった。ドヴァーノフは寝床に移動し、仰向けになって眠った。蠟燭が燃えつきる前にと、セルビノフは急いでソフィヤ・アレクサンドロヴナへの手紙を書きあげた。彼はこう書いていた――〈チェヴェングールでは、一か所にかき集められたルンペンプロレタリアートによって共産主義が建設され、そして彼らの中に半インテリのドヴァーノフが暮らしていますが、彼はどうやら自分が何を求めてこの町にやって来たのか忘れてしまったようです〉。セルビノフは、眠るドヴァーノフに――目が閉じられたために変化したその顔や、死の安静のうちに伸ばされたその脚に目をやった。〈ドヴァーノフは――〉セルビノフは続けた。〈あなたがはじめ恋していた人の写真に似ていますが、この人があなたを愛していたと想像するのは難しいです〉。それからセルビノフは付け加えた――出張中には胃が痛むこと、そしてこの半インテリと同じようにチェヴェングールにやってきた理由を忘れ、ここに残って存在することを受け入れてもよいということ。

蠟燭が消え、すぐには寝つけないのではないかと恐れながら、セルビノフも長持（ながもち）の上に横たわった。しかしセルビノフはすぐに眠りこみ、新しい一日は瞬時に目の前にやって来た――幸福な人間にとってそうであるように。

この頃までに、チェヴェングールにはすでに数多くの工作物が作られて貯まっていた。セルビノフは歩き回ってそれらを目にしたが、そうした工作物が何の役に立つのか理解できなかった。

まだ朝のうちにセルビノフはトウヒから作られた木製のフライパンが机の上にあるのを見つけたし、屋根には穴が開けられて鉄製の旗が嵌めこまれていたが、それが風になびくことはなかった。町そのものが稠密（ちゅうみつ）してこのとおり狭くなっているので、セルビノフは、作付面積が本当に増大したというのなら、住むための場所を犠牲にしたということなのだろうと考えた。見渡す限りあらゆる場所で、チェヴェングールの人びとは熱心に働いていた。草の中に座ったり納屋の中や玄関に立ったりして、おのおのがそれぞれに必要なだけ働いていた――二人は木のテーブルに鉋（かんな）をかけ、一人は資材不足のために屋根から取ってきた鉄材を切ってたわめ、四人が編み垣に寄りかかって予備の草鞋（わらじ）を編んでいた――誰かが放浪者になりたくなった時のためだ。

ドヴァーノフはセルビノフよりも早く目覚め、ゴプネルを見つけようと急いだ。二人の同志は鍛冶場で